

第2期県立高等学校将来構想審議会
高校教育改革検証部会
(第7回)

平成24年2月2日(木曜日)
午前9時30分から正午まで

1 開 会

○司会 本日はお忙しい中、御出席を賜りありがとうございます。

はじめに会議の成立について御報告申し上げます。御出席者数は、現在のところ、6名でございます。過半数の委員の皆さんに御出席いただいておりますので、県立高等学校将来構想審議会条例第5条第2項の規定により、会議が成立しておりますことを御報告いたします。なお、倉光委員からは、現在こちらに向かわれているという御連絡をいただいております。

それでは、ただいまから「第7回高校教育改革検証部会」を開会いたします。開催に当たりまして、宮城県教育委員会教育長、小林伸一から御挨拶を申し上げます。

2 あいさつ

○小林教育長 おはようございます。部会の開会に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

今日は雪が降りまして大変お足もとが悪い中、御出席をいただきまして厚くお礼を申し上げます。いままで何回となくお時間を割いていただき、御議論を進めていただいておりますことに、改めて感謝を申し上げます。

前回の部会からは、「男女共学化」及び「全県一学区化」についての検証に着手していただいております。こうした教育施策の検証は、近年のように社会の変化が大きい時代にあって、常に施策の合理性なり有効性を点検しながら、中長期的な視点から本県の高校教育の在るべき姿を見定め、必要に応じて逐次施策の見直し等につなげていく上で大変重要であると考えております。

教育施策の成果や課題についての本格的な検証は、私どもにとって初めての試みではありますが、委員各位のお力添えをいただきながら、適切な検証システムを構築し、社会の変化や時代のニーズに即した、実効性のある教育施策の推進を図ってまいりたいと考えております。そして、未来の日本の社会、新たな時代を創造する人づくりに向けた高校教育の実現のために、今後どういった方向性の施策展開が必要か、そうした観点からも御提言・御意見をいただければ幸いです。

どうか忌憚のない御審議いただきますようお願い申し上げます。大変簡単ですが、御挨拶に代えさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

○司会 以後の進行につきましては、柴山部会長にお願いしたいと思います。

3 議事（1）会議の公開について

○柴山部会長 それでは、議事を進めたいと存じます。議事（1）「会議の公開」について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局 それでは、資料1「会議の公開について」を御覧ください。こちらは、県の情報公開条例の規定を抜粋したものでございます。

高校教育改革検証部会の会議については、平成22年11月に開催しました第1回部会において、原則「公開」で開催することとし、個人情報などの非開示情報を取り扱うこととなった場合には、その都度、会議の公開の有無を議決することを議決しております。

今回の部会では、委員の皆様から「学校別のデータを分析すべき」との御意見がありましたことから、議事（２）では学校別のデータをお示しし、これに基づいて議論いただくこととしております。事務局としましては、これらのデータの中には、県情報公開条例上、非開示情報に当たるものが含まれていると判断したため、この点につき御審議をお願いいたします。

非開示情報に当たると判断したデータは、２種類でございます。１つ目は、学校別の「不登校者数」及び「いじめの件数」です。この資料は、個人の氏名を表示したのではなく、人数又は件数のみを記載したものです。数が極めて限定されておりますことから、一部の学校については本情報から特定の個人が識別されてしまうおそれがあり、県情報公開条例第８条第１項第２号に該当するため、本資料に基づいて行われる議事（２）の審議については、同条例第１９条第１号の規定により非公開で行うべきと考えております。

２つ目は、学校別の学力テストの結果でございます。県立学校の入学者選抜は、学校・学科の特色に応じて、その教育を受けるに足る多様な能力と適性等を積極的に評価することとされており、学力検査の結果だけではなく、調査書その他の資料に基づき審査しております。学力テストの平均点が学校別に公開された場合、不用意に学校間の序列化を招くとともに、特定の学校に志願者が集中するなど、入学者選抜の適正な執行に支障が生じるおそれがあると考えられます。

よって、県情報公開条例第８条第１項第７号に該当し、本資料に基づく議事（２）の審議については、同条例第１９条第１号の規定に基づき、やはり非公開で行うべきと考えております。

なお、資料中、各学校の表記をＡ校、Ｂ校というように、記号化して表示することも検討いたしましたが、他の情報との組み合わせから容易に学校を特定することが可能であり、非公開はやむを得ないものと考えております。以上、よろしく御審議賜りますようお願いいたします。

○柴山部会長 ただ今、事務局から本日の議事（２）については非公開で実施すべきとの提案があり、その理由についての説明がありました。これにつきまして、何か御質問・御意見はございますか。

○羽田委員 学校のケースが出るとまずいので、御提案のとおりでいいのではないかと思います。

○柴山部会長 それでは、事務局原案のとおり承認することとしてよろしいでしょうか。

（「はい」という声あり。）

○柴山部会長 それでは、本日の議事のうち、（２）『男女共学化』及び『全県一学区化』の現状把握については非公開で審議を行い、議事（３）以降は公開で行うこととします。

では、次の議事（２）については非公開で審議を行います。傍聴者の皆様には、大変恐縮ですが、議事（３）が開始するまでの間、御退席をお願いいたします。時間的には１時間程になるかと存じます。

4 議事（２）「男女共学化」及び「全県一学区化」の現状把握について

＊議事（２）は、非公開により審議を行いました。

＊議事の概要

① 男女共学化

ア) 主に次のデータについて、学校のタイプ別（統合による共学化校・旧男子校・旧女子校）及び学校別に整理し、年次推移を確認するとともに、学校のタイプ別・学校別の特徴を分析した。

1年次生徒の男女比，一般入試出願倍率，男女別クラスの編成状況，教員の男女比不登校率，中退率，いじめ・暴力行為の件数，生徒の学校評価，運動施設の状況部活動及び学校行事の状況，共学化校の沿革，教育目標

イ) 主な論点は、次のとおり。

- ・ 学校別の学校評価データを見ると、授業や進路指導，学校施設，地域や伝統に根ざした学校の特色づくりといった項目で，学校ごとの特徴が見られる。次のステップとしては，更にデータ分析を進めるとともに，教育庁の施策プロセス及び特徴のある学校の学校経営の状況を調査することとする。
- ・ 共学化に伴う教育環境の整備や教育活動の実施については，学校評価のデータなどを手がかりとして指標を設定した上で現状把握をしていく必要がある。

② 全県一学区化

ア) 主に次のデータについて，地区別及び学校別に整理し，年次推移を確認するとともに，地区別・学校別の特徴を分析した。

同一地区の公立高校（全日制課程）への進学割合，一般入試出願倍率みやぎ学力状況調査（国数英）の結果，地区別の通学手段の状況

イ) 主な論点は、次のとおり。

- ・ 特定の地区・高校への志願者の集中や生徒の流出に伴う学力低下など，全県一学区化に当たって懸念された事項が生じていないか継続して見ていく必要がある。
- ・ 一学区化前後の生徒の地区間移動のデータを見る限りでは，学校の選択肢の拡大と同時に，地域ごとに高校のバリエーションをつくって地域内の高校に通えるような施策展開が重要だと思われる。今後，教育庁の取組や各学校の特色づくりの状況を見ていく必要がある。
- ・ 中学校への情報発信が大切であり，オープンスクールを充実させるとともに，参加した生徒の満足度を把握していく必要がある。

5 議事（３）「男女共学化」及び「全県一学区化」の検証方法について

○柴山部会長 それでは，議事（３）『男女共学化』及び『全県一学区化』の検証方法についてに移りたいと思います。はじめに，事務局から説明をお願いします。

○事務局 それでは，議事（３）の「男女共学化」及び「全県一学区化」の検証方法について，事務局で案を御用意いたしましたので，資料３及び資料４に基づき御説明いたします。こちらの資料３及び資料４をたたき台として，「男女共学化」及び「全県一学区化」の検証方法，特に

こういった視点及びデータで検証を進めていくかといった点を中心に、御審議いただきますようお願いいたします。

はじめに、資料3について御説明いたします。本資料は、前回の部会において、委員から『男女共学化』に当たって県民の方が懸念していたことを確認したい』との御発言があったことから、御用意したものでございます。

前の「県立高校将来構想」、そして現在の「新県立高校将来構想」の策定に当たっては、それぞれ意見聴取会や県民意識調査を実施しており、その際、「男女共学化」の実施についても御意見をいただいております。今回、事務局においてその内容を全て確認し、「共学化」に対する賛否及びその理由を整理いたしました。網掛けの部分が、共学化に対する賛否の根拠とした点、すなわち県民の方の評価の観点でございます。

表を見ますと、平成11年度に開催しました「県立高校将来構想を聞く会」及び平成22年度に実施しました「高校教育に関する県民意識調査」において、共に「伝統や校風」「男女が共に学ぶ教育環境」「学力」「学校の選択肢の広さ」が評価の観点となっています。さらに、平成20年度に実施した意識調査では、「学校適応や生徒指導」「部活動」及び「学校行事」が評価の観点として加わっています。

なお、「男女共学化」の評価指標については、資料4においてピックアップしております。資料3にある評価の観点の網掛け部分のうち、資料4にも列記しているものについては、資料3の各項目の文章の最後に括弧をつけて、①②③という数字を付けております。この①②③は、資料4の「検証のチェックポイント」の文頭に①②③と付しているものと対応しております。資料3については、以上でございます。

続きまして、資料4について御説明いたします。本資料は、前回の部会に提出したものに追加・訂正を加えたものでございます。事前に委員の皆様にお送りした内容と少し変更がありますので、今日お渡しした資料で御覧いただきたいと存じます。

こちらの資料については、「男女共学化」「全県一学区化」の施策としての合理性・有効性を検証するために、まず(1)で、「男女共学化」「全県一学区化」を決定した当時における施策の目的を整理いたしました。また、検証の視点として、(2)の「施策目的を実現するための取組は適切に実施されているか」及び(3)「施策の実施に当たって懸念された事項をはじめ、弊害は生じていないか」を設定しました。

そして、(2)及び(3)の検証の視点が達成されているかどうかを把握するために、こういった項目やデータで見ればよいのかについて、事務局が想定したものを「検証のチェックポイント」と「検証データ」において列記しております。

内容については現段階では断片的なものであり、この表をたたき台として、この部会において御審議いただきますようお願いいたします。

資料の裏面を御覧ください。「2. 施策の実施による教育効果の検証」とあります。ここでは「男女共学化」及び「全県一学区化」の実施によるアウトカムの評価をするに当たって、現時点で事務局として考えられる評価指標を記載しております。

「教育効果の検証」につきましては、最終的には(2)にありますとおり、「県立高校将来構想が目指す人づくりが達成されているか」を評価していくことになると思いますが、この点についてはより中長期的な視点が必要になるかと思われます。また、この点を評価すべき時期及

び評価項目は現段階においては明らかでなく、今後、検証作業を進める中で、適切な時期・指標を見出していくことになるかと思われます。しかし一方で、その最終アウトカムの評価指標を設定するための足がかりになるような指標、すなわち中間アウトカムの評価指標となり得るものも、順次見ていくことが必要と考えました。そこで、現段階における事務局のイメージにとどまるものではございますが、2. (1)において、中間アウトカムの指標として、「検証のチェックポイント」と「検証データ」をピックアップしております。資料の内容については、以上でございます。

本日は、まずは事務局で御用意いたしました「検証のチェックポイント」「検証データ」をたたき台として、今後どのような指標により検討を進めるべきか御審議いただきたいと思いますが、次回以降の部会においてもデータ分析を重ねながら、より多面的かつ適切な指標を設定していただければと存じます。御説明は以上でございます。よろしく御審議を賜りますようお願いいたします。

○柴山部会長 ただ今事務局から、「男女共学化」と「全県一学区化」に関する検証を進めていくに当たっての、評価指標の案について説明がございました。はじめに、御質問をお受けしたいと思っております。どこからでも結構ですので、お願いします。

○羽田委員 資料3を見ると、プラスの面もあれば懸念する声もある。やはりこの両方に応える、きちんとした評価をしなければいけないと思います。これは評価の重要な柱になるのではないかと思います。

その上で、チェックポイントについては、基本的な項目はかなり挙がっていますが、もう少し整理した方がいいと思います。共学化も一学区化も進行中の施策であり、卒業生も出切っているわけでもない。教育庁なり学校がアウトプットとしてどういうことをやられているか、その準備がどうか、そのプロセスをきちんと検証していく枠組みがあったほうが良い。しかも、これらの点については、今の段階で検証するのが重要ななという気がします。

そのためにも、施策プロセスの部分をもう少し構造化すべきです。1つ目の枠は準備段階のプロセスです。共学化の準備がどのように行われたかという、そのプロセスのところが大きな話になるかなと感じました。準備段階には、次のサブアイテムがあります。1つは、共学化の理念と目的がきちんと保護者・地域住民に伝えられ理解を得られたか。2つ目は、教職員の理解が得られていたか。どういうトリミングがされたか。3つ目は、生徒に対する説明が十分だったか。これは(2)で言うと⑦に当たると思います。4つ目は、共学化を進める上での課題の洗い直しが各学校単位及び教育行政全体で検討されていたか、ということです。大きな制度改革であればあるだけ、準備段階としてきちんと施策の意味を理解して、関係者間での共有化を図る。これがきちんとしていないとうまくいかないに決まっています。その辺のところの準備や適切性についても、1つ大きな項目にすべきだろうと思います。その中に①②⑦が入るのではないかと思います。

2つ目の枠が、制度を実質化するための取組がどう進められたか。これはおそらく指導体制、③④⑤⑥が入るのではないかと。

3つ目に大きな枠は、共学がどのように具体的に進行しているか。これは、⑩の「学校選択

の機会が拡大しているのか」。⑫の「学習面での弊害が生じていないか」は、学習面の成果みたいなところ、むしろプラスのところやったほうが良いという気もしますが、それが入る。そして、男女共学ですから、男子・女子の適切な比率。もちろん幅がありますけれども、これがどう進行しているか。

それから、ここにある検証データはほとんどそのまま使えますが、最初に申し上げた施策の準備段階のプロセスに関するデータはない。いろいろな施策文書があるでしょうから、それで補っていただく。そうすると、どのように進んできたかというのが構造的に分かると感じました。

○柴山部会長 私も1つ質問があります。(1)のところでは施策の目的が3つ挙げられています。これらは、どこかでオーソライズされたものですか。それとも、この検証のためにまとめたものとしてあるのでしょうか。

○事務局 共学化及び一学区化を決定した文書から引用しています。男女共学化については前の県立高校将来構想から、全県一学区化については「県立高等学校通学区域見直し方針」からでございます。

○柴山部会長 出典を明示していただけるといいと思います。一番大きな目的ですから、施策の流れに乗せていけるか、ということだと思いますので。それから、「男女共学化」と「全県一学区化」は、時期的にはほぼ同じような形で進んだわけですね。これをチェックするとき、同じ流れに乗せてチェックしたほうがいいのか、物理的に紙も分けてしまって、男女共学化は男女共学化、全県一学区化は全県一学区化としてチェックしていったほうがいいのか。その辺りの御意見をいただければと思います。両方が同時並行的に進んでいる。絡み合っているもので、事務局案のような形で考えていった方がいいのか。両方があります。

○白幡委員 そうは言いながらも、時間的には少しずれていますし、さっき羽田先生がおっしゃったように、構造化をするところは同じように構造化すればいいと思う。だけど、僕は整理するというのは別な問題のような気がするんです。時間的にもタイムラグがあるし、長期で見なければいけないし。全県一学区化はまだ始まったばかりで、まとめてしまう方が逆に違和感があるような気がします。

○柴山部会長 さっき非公開の議論をしていた中で、男女共学化の問題と全県一学区化の問題は、質的に異なるという印象を受けたんです。その辺りはいかがでしょうか。

○倉光委員 確かに分けた方がいいかと思います。それから、こちらで準備して検証できるデータについて、学校現場に一度フィードバックして、学校現場でどういうふうに行っているかというところを確認して、それを検証するというプロセスも必要かと思います。ただ、時間的な制約もある中で、どこまで課題と成果が検証できるか。そのときに、どこまで学校現場の主張・意見まで入れるのか。学校現場からしますと、一方的に委員会の検証を受けてということでは

なく、学校現場でないと分からない成果と課題の部分、特に課題をどうフィードバックするか。そういう取扱いも必要かなと思います。

○羽田委員 教育庁にはそういう仕組みは何かありますか。案を作る前にインタビューなりヒアリングを行う手法と、できたものに対してパブリックコメントを求めるものと、2つの方法があると思うんですね。

○教育企画室長 個別の事例に応じて、方法を選択していると思います。

○羽田委員 パブリックコメントだと、おそらく当該学校以外にもたくさんのコメントが取れます。それが良い場合もあるし、悪い場合もある。最終報告に反映させるとすれば、むしろ事前の段階で当該学校だけにヒアリングとか意見を求めるという手法が良いと思います。

○倉光委員 データ分析をして、部活動を推進するに当たって施設に課題があり得ることが確認されました。これは学校の中だけで対応するものではない。今も個々にやっていると思うんですが、近くの高校が連携してお互いに施設やグラウンドを融通し合うとか、多分、そういう問題に対する捉えが出てくるのではないかと思います。そうしていかないと、現実的な解決策になっていかないとと思います。

○羽田委員 そうすると、事前ですね。できたものに対してコメントをというよりは、むしろ課題を整理して、出す前のプロセスできちんと踏まえたほうが合理的ですね。

○柴山部会長 問題は多方面にわたっていますので、何もかもやろうとすると、時間的にも、パワーも限られる。はじめに、この部会として見る座標を作る。どういう視点で見なければいいのか、先ほど出していただいたデータを見る。どの辺りに問題がありそうなのか、成果が得られていそうなのかを把握しておかないと、評価の枠組みとして効率が悪いような気がします。

○倉光委員 評価の枠組みあるいは検証項目をここである程度合意して、その上で学校現場にフィードバックして、学校現場の意見なり主張なりを確認するというプロセスは必要かと思いません。

○柴山部会長 それでは、検証の方針をここで整理してみましようか。まず、男女共学化の際、あるいは全県一学区化の際に、懸念とか期待とか、色々なものがあつたかと思うんです。それにきちんと応えられ、かつ、実証的なデータでそれを見ていけるような仕組みです。

なおかつ、いずれも現在進行中の施策ですから。プロセスを見ていく。今、それが貫徹されているかどうかという話と、それによって本当に期待通りの成果が得られているかどうか。

それから、当然、現場でなければ分からないこともありますから、そのところをきちんと情報として吸い上げられるような仕組みをつくる。

○羽田委員 データを見る限り、問題の所在と構造はそれなりに見える。学校における課題がある程度きちんと出てきている。それに対する指摘と処方箋を書く。

私としては、やはり施策の準備段階のデータを確認したい。これは大改革であるので、生徒から教職員、教育行政、もちろん地域住民も含めて、理念と目的を関係者全体がきちんと共有するという事は非常に重要です。その辺のところのチェックポイントがまだ入っていない。資料としてもない。決めておいてあとは学校任せというのでも困りますし、学校で独自の取組をやったのか、そのためにどんな課題があるのかという洗い出し。そもそも当該学校できちんとやったのか。その課題についての教職員の間でコンセンサス。これは学校教員の課題ですけど、それを含めての資料なりがもう少し出てくると、中身の問題としてはいいのかなと思います。その他については、ここにある資料でほとんど尽きているような感じもします。

○柴山部会長 施策の検証の（１）から（３）までの流れはこれでいいと。

○羽田委員 良いと思います。あとは、男女共学化に限定すれば、問題はチェックポイントのところの①から⑯まで。この構図がランダムなので順序づける。

この検証で大切なのは、どういう問題・課題があるのか、不適切さがあるかという洗い出しです。なぜその不適切さが出てくるのかということの検証も重要です。しかし、施策のプロセスが、準備段階も含めてどのように進化したかを把握しないと、不適切さの原因は分からない。その点がもう少し構造的にとらえられるように。（３）の状況を把握するためにも、（２）の内容がもう少し潤沢じゃないとうまく説明がつかなくなると思います。

○柴山部会長 （３）についてはいかがですか？

○羽田委員 （３）はこの項目でいいと思います。資料３に出てきている共学化に対する色々な提案・疑問からすると、これだけでいいのかということはあるんですが、⑫から⑯までは一応入っているのではないかと思います。

問題はむしろ、弊害と取組の適切性との関係を問う構造にしておかないといけない。どこに不適切さがあったから弊害が生じているとか。あるいは、どこの取組が良かったから弊害が提案されていない状態になったとか。その説明がつかない。そこで、（２）の取組の適切な実施のところを、準備と、実質化の取組と、実質化の状況と、大きく３つに分けて、①から⑧までを分配し直す。かつ、新しいものを少し加えてみたらということです。あとは、学校経営の位置づけ。これは白幡委員が前からおっしゃっていました。学校経営の中で、どういうふうに意識的にやっているか。これはかなり大事なところですよ。

○柴山部会長 この間、小澤委員もおっしゃっていましたよね。「共学化に関して情報発信が足りない。だから、生徒はイメージだけで動いてしまっている。」と。それが（２）のチェックポイントとして出てくる。

○羽田委員 （２）のチェックポイントの関係づけなり構図づけが、一番大事かなと思って見て

おりました。

○倉光委員 この検証では、成果と課題の洗い出しまででしょうか。それとも、その懸念とか弊害に対する処方も検討するのでしょうか。たとえば、「男女共学化をしたら部活動で制約を受けている」とよく聞くわけですよ。旧女子校では、グラウンドなくて野球ができない。しかしながら、近くの高校と連携・協力をして、それで野球部をつくってやっているところもあるわけです。だから、「野球部はできない」と、ここで終わるのか。それとも、色々な協力・支援を得ながら、支援を得ながら、連携をしながらやることによって、もともと女子校の共学化校でも、野球をやっているところもあるわけです。課題の提示だけで終わるのではなくて、そういう課題をどのように解決していくのかということをしなないと。

○羽田委員 そうですね、前回の答申でも、「地域連携」や「志教育の展開」を提言しています。やはりそれがないと、受け取った側でもどうしていいかわからない。

○白幡委員 羽田先生の御指摘のとおり、もっと構造化した方がいいと思います。

それから、いままで説明してもらった資料だけで結構なデータが出ている。これ以上にデータを取る必要はない。今まであるデータで分かるような気がしているんですよ。

前の検証のときに倉光先生がおっしゃったけど、必要なことはグッドプラクティスとバッドプラクティス。「こんないい学校もある」「ちょっと懸念される学校もある」、そこだけ絞り込んでやる。倉光先生がおっしゃるように、他校と連携したというようないい例を出す。「こうしろ」というよりも、「こういういい例がありますよ」「こういうところが少し不足しているんじゃないですか」という言い方でやる。これからは、良かったところから絞り込んでいく、悪かったところからその原因を探っていくということをやります。データを見ていて、そう思ったことが一つ。

それから、やっぱりこれも前と同じですが、プロセスという言い方をすると、前工程の中学校でどういう進路指導をしているかとか、どういうオープンスクールに対する呼びかけをやっているのか。これもまた、うまくいったところと、うまくいかなかったところを見る。中学校でどうだったのかということ。それからアウトプット、出口です。進学とか就職とかいうことが、従来とどう変わってきたか。入口と出口でも、もう一つ前の入口と、もう一つ後の出口を見たいという気がする。

それから、全体を通して。われわれもこうやって議論をすると、必ず議事録が公開されます。しかし、必ずしも説明責任が果たされていないというのが結構ある。いつも言いますが、アカウンタビリティという大きな施策の中で、教育庁がやるかもしれないし、学校がやるかもしれない、他がやるかもしれない。説明責任はその都度どうやっているのか。それは検証したいという気がしているんですけどね。

○小澤委員 関連して。情報発信の不足といったようなものがどうしてもあるんじゃないかと思います。中学校の現場の先生方が何よりもそのことをよく把握していない。把握していないということは、高校側が具体的に、きめ細かに、丁寧な情報発信の仕方をしていないのではないかなと。中学校は結構忙しいですね。ですから、子ども達はオープンスクールに参加したくて

もできないといったようなところもあります。そういうところは、たとえば先生方が来て説明するのもいいですが、高校生のリーダーが来て、生徒目線で説明する。その方が子ども達は理解しやすいのではないかと考えています。今までですと、学校の教頭先生や進路指導担当の先生が来てやるんですけれども、どうしても講義口調になったり、聞きたいところが出てこなかったりします。高校はもっともっとPRをしていく。それが必要だと思いますね。

○羽田委員 おっしゃるとおりですね。私が最初に言った「準備が適切なのか」というのはそんなんですよ。

○白幡委員 共学化も全県一学区も、平均値で見るとあんまり変化がないように見える。だけど、低い値が出ているところは結構ありますよね。これだけデータをいただいて見ていると、色々なものが見えてくる。あんまりデータをいっぱい揃えても大変。1校か2校ずつ、あるいは1学区のどこかだけを見て、何かを引っ張り出してくる。グッドプラクティスからの提言とか、ちょっと不足している部分はもしかしたら説明責任やきめの細かさがなかったからとか、色々出てくる。事実から提言に結びつけることをやればいい。このバラツキから見て、もっと絞ってもいいのではないかという気がしています。

○羽田委員 宮城県は、高校の年間の学校経営のプランを作りますよね。それをざっと見てみる。統合や男女共学化を配慮した施策、学校単位で何をやっているかをチェックできないかなと思います。

○教育企画室長 検証データとして、学校の取組の中に「教育目標」を挙げています。

○羽田委員 そうですよ、それでチェックできる。そういうのは先生方を通して伝わって来ているんじゃないですか。うまくいっているか、そうでないかというのは。

○柴山部会長 お話を聞きながらずっと思っていたのは、アカウントビリティの果たし方です。グッドプラクティスを例として挙げる。それはとても良い方法だとは思いますが、逆に、バッドプラクティスも挙げてしまっているのかどうか。さらに、ケーススタディ的に「この学校はいいですよ」というだけで、教育施策全体としてアカウントビリティが果たしているかどうか。ちょっと不十分かなというのがある。そうすると、また平均値に戻る。平均値に戻ると、いまのところそんなに不都合は見えてこないという、当たり障りのないところで終わってしまいます。やっぱりその両方が必要だなという気がしますよね。

全体としてざっくり、平均値で見たときには、その施策に対して特に不都合はない。場合によってグラウンドとかの問題はあるかもしれないですけど、細かく見ていくとグッドプラクティスもあれば、そうでないところもある。そういうふうに述べていくのがいいのか。最後の検証部会としての報告書のイメージが、頭の中で浮かばない。その辺りの御意見をいただければと思います。

○白幡委員 部会長がおっしゃるように、平均的に見ると確かにそんなに不都合はないというふうに見えますよね。特に男女共学化に関しては、グラウンドや施設の問題を除いて不都合はない。だけど、われわれはより良くしていきたいということで検証するわけです。だから、グッドプラクティスを見た上で、「そんなにうまくやっていたのか」と。グッドプラクティスを見るときに、事務局でやってくれたこういう視点で見ればいいわけです。十いくつもありませんから、そういう視点で見ればいいわけです。グッドプラクティスは記名にしてもいいと思うんです。「どこの学校だ」と言っていていいと思う。バッドプラクティスの場合は、「どこの学校だ」と言う必要はない。バッドのところは少し抽象化して、「こういうところも少し意識していかないと、より良い共学化のアウトカムは得られませんよ」という検証部会の提言で僕はいいと思うんです。

○柴山部会長 グッドプラクティスのほうは、学校さんも情報を出してくれると思うんですけれども、バッドプラクティス、懸念した部分というのはなかなか外に出していただけないですよ。その辺りの切り込みは……。

○白幡委員 逆に言えば、学校現場も悩んでいらっしゃるんじゃないですか。学校評価の問題をこれで見ると、いい学校とうまくいっていないところがあります。おそらく学校現場で困っていると思いますよ。悪さを指摘されることがどうのこうのではなくて、どうしたらいいかという視点で考えていらっしゃる。そのときに、一緒になって相談に乗ってもらえるということは、決して悪いことではない気がするんです。それをあげつらうわけではないから……。すみません、僕は現場を知らないから。

○倉光委員 学校現場のバッドプラクティスは、何かをやってバッドになるのではなくて、何もやらないうちにバッドになってしまっているという感じだと思います。だから、「出せ」と言われても、「何もしていなかった」という表現になってしまうのかなと思います。

○羽田委員 「こうやったから悪くなった」と明確に言えれば、必ず改善されているはず。むしろ、「確かに状況は悪いけど、何が原因か分からない」というのではないですか。バッドプラクティスというよりは、ちょっと困っている事例、問題になっている事例として把握する。それが特定の行動によって良くなっていることもあるけど、多くはどうやったら良くなるか分からない。そういった事例を学校から出していただく。

○柴山部会長 今の議論を整理いたします。事務局案の施策の検証のところの（１）から（３）までの大枠はこれで進めていくと。（１）に関しては根拠を示して、それが最終的な目的になる。（２）と（３）については、羽田先生がおっしゃったような形で構造化すること。

また、男女共学化、全県一学区化は分けて扱うということ。

それから、白幡委員から御指摘があったように、統計的なデータとしてはこれ以上細かく見ていくのではなくて、むしろそこから見えてくるグッドプラクティスの情報を取る方向で考えていくということ。学校側にはバッドプラクティスではなくて、「困っている」「助けてほしい」

といった問題点を出していただくという形。それをこの枠組みの中に乗せていく。

そういうところまで、この検証部会では扱うというような形でよろしいでしょうか。

○小林教育長 ちょっと意見を申し上げます。共学化と一学区化を分けて議論するというのは、それでよろしいかと思えます。

資料4の表の(3)について申し上げれば、たとえば県内すべての高校を共学化したことに伴って、どういう不都合なり弊害が生じているのかということこれから見ていく。そのときの不都合なり弊害が、羽田先生がおっしゃったような従来の準備なり取組が不十分だから起きている不都合なのか、それとも共学化というものに本質的に伴って生じうる不都合なのか、そこは慎重に議論していく必要があるんだろうと思えます。

後段の話は、かなり中長期的に見ていかなければならない問題だろうと思えます。短期的に見て、進め方を工夫すれば改善されるものももちろんあるでしょうけれども、そうではないものもあり得る。そこを部会としてもきちんと視野に入れて、議論をしていただく必要があるのではないかと考えております。

それから、施策の目的を(1)で挙げてあるわけです。ここで挙げておりますのは、あくまでも当初の目的ということでありまして、これで終わりということではないはずで、この結果として何を求めるのか。何を目指すのかということがあるわけです。それが、資料4の裏面に示している「人づくり」の方向性であります。ここの(2)で示している「最終アウトカム」。これはあまりにも抽象的すぎる。ここからどういう観点でチェックしていくかというのが、なかなか出てこないわけでありまして。したがって(1)で、事務局レベルで考えた「中間アウトカム」というものをお示ししているということでありまして。最終的にどういう人づくりを求めていくのか。それがうまくいっているのかということ、中間アウトカムとして示した。もちろん、ほかにもあると思えますけれども、この辺を見ながらチェックしていただくと。これもかなり中長期的にやっていくべきものではないかなと思っておりますので、その辺も念のため申し上げておきたいというふうに思えます。

○柴山部会長 確かに教育長がおっしゃるように、教育効果というのはとても難しい。短期的に見られる部分と、長期的に、それこそ20年後の話、30年後の話につながっていくものがございまして。「最終アウトカム」というところで宮城県が目指す将来構想を挙げておりますが、これはすごく長期的な視点で目指していく。これはおっしゃるとおりだと思います。一方で、検証部会としてできる範囲と、やはり責任を持たない範囲があるかと思うんです。後者の部分に関しましては、いま御指摘いただいたような長期的な部分と関連しますが、理想としている方向性を持った上で、今現在検証している部分はその方向に対してこういう位置づけですよ、というものをきちんと説明しながら、それこそわれわれ検証部会のアカウンタビリティを果たして。そういう重層構造の形で対応していければいいのかなと、いまお話を聞いていて思いました。

委員の先生方はいかがでしょう。男女共学化も全県一学区化も、今の時代に合わせて施策をとられたのだと思いますが、その向こうには、子どもたちに20年後、30年後にこういう人間になってほしいという理想があったと思うんです。しかし、そこはデータとして検

証することは絶対にできないと思います。ですから、データを検証していく際に、頭の隅にでもいいですから、そういうはるか彼方のゴールを意識しながら解釈していく。「本当にこれは、最終的な目標につながるステップなんだろうか」みたいな、そういうところです。難しいと思います。とても高度な、非常に難しい課題だと思うんですけども、方向性としてはそういうことだと思います。

○羽田委員 教育長は大事なことを2つおっしゃったと思うんです。アウトカムのところについては、正直言うと、この文章の限りでわれわれは議論して納得していく。要は測定の手法だと思います。たとえば、「活用していく力を習得する」というときに、どういう測定方式でそれを測るか。今はOECDのPIISAテストがあります。これまで支配的だった知識・理解・記憶暗記型ではないので、いろいろな応用力が活用される。日本の結果はそんなに低くありませんが、あのタイプのアウトカム測定指標を全体で共有して、小学校も含めて導入しない限り測れない。アウトカムの人づくりの部分は、どういう形でそれを測って、教育内容の在り方に反映させるか。そこの仕掛けが一番のポイントですよ。これはわれわれのところで議論するだけではなくて、長期の考え方で、かなり高度な研究をしていかなければいけない。

○柴山部会長 私は教育測定論の人間ですから、常々こういうことを考えているわけです。こういうすごく大きなことというのは、数値にした途端に枯れてしまうんですよ。だから、むしろ数値にしない。あくまでも「こういうふうなものがあるんだ」というレベルで置いておいて、ただ手元にあるデータとしてきちんと押さえていけるという。そこの整理ですね。

○羽田委員 僕はもう2年くらい付き合っていて、この検証は、システムとしては精緻だと思います。具体的に言えば、データで検証していくというこういうものが出てくる。今回も非常に詳細に色々なデータが使われていて、そこで見ていく。定量的なデータで言えるということは、マクロの教育診断で非常に重要。欠けているデータもあるけれども、これがだんだん整備されていけば、トータルな教育の効果が把握できる。

問題は、人づくりの実質。まさにどういう能力を身につけたかということだけではなく、多分、日本全体でもまだ手を着けていないところ。われわれもさっき言ったPIISAテストのような、新しい学力像と結びつけた測定を考えなければいけない。これはかなり長期の課題。日本でも高校教育部門で、このPIISAテストを作ることがある。国立教育政策研究所を中心にするんですけども、全然進まないんですよ。できない論ばかり。大学レベルの専門教育でも非常に難しい。しかし、いつまでも難しい、難しいと言っていられない。PIISAの動向を見ながら、宮城県としても中等教育の成果をどのように測るかというのは、多少考えてもいいのではないかと思います。

○柴山部会長 白幡委員がおっしゃったグッドプラクティスを取り出してそれを解釈していくときに、この部会の力量が問われるんですよ。数値からどれだけ背景情報を読み取れるのか。どういうことが、そこから読み取れるのかということ。数値だけにすると、本当に平均値。それで終わりなんですよ。何も読み取れません。誰でもできることです。そのところは、や

りながら考えていかないといけない。

○白幡委員 自分の頭の中の整理ですけど、教育長のお立場での先ほどの御発言は、十分理解できるんです。でも、もともと、県立高校将来構想の検証をやるということがある。新県立高校将来構想で、「こういうことで検証しましょう」と決めました。そういうことを検証していけば、最終的なアウトカムになる。一般的に、物事がうまくいっているということもエビデンスになるのではないかと思います。

1つずつに評価項目を作るのではない。前段の検証部会でやったものもそうだし、今回のこれもそうです。この検証部会は、最終的なアウトカムのために将来構想全体をどう評価するか。そういう意味合いでとらえておかないと、前に戻ってしまうような気がするんです。将来構想の検証をどうするのかというので、「いくつかの項目でやりましょう」と。最初に決めましたよね。

○羽田委員 そうですね、おっしゃるとおり。僕は評価というのは、とても抑制的なものだと思います。

○白幡委員 教育長がおっしゃっていることも分かるけれども、こういうことも何かでという話になってくると、非常にまた……。

○羽田委員 そういうところにつながるような評価という意味で私は理解しましたので、それはおっしゃるとおりだと思います。

○佐々木委員 確認ですけれども、学校現場のほうからの成功例とそうではないというのは、どのようにして吸い上げるんですか。最初は、「ヒアリングは委員が行う」というのがありましたが、時間の都合で事務局が実施されました。何校かピックアップして、調査項目としては学校経営とか学力定着に向けた取組などを聞き取ってきていただいて、結構、具体的なことが分かったので、貴重なデータでした。そういった現場の先生方から男女共学化と全県一学区化に対する意見の抽出は、どのようにされるのでしょうか。

○教育企画室長 時間軸から言うと、その手法については4月以降と考えています。今の段階では、先ほど申し上げました定量的なデータの積み上げ、あるいは過不足がないかというのを十分議論していただく。おそらく定量的なデータからは見えないところがあるだろうということで、そこは学校現場に行って聞こうという、こういうやり方で考えています。それは第一の検証のテーマについても同じでした。さらに委員の方々に調査していただくか、あるいは事務局主導でやるかは、別途御相談させていただきたいと思います。

○柴山部会長 時間が予定よりもオーバーしています。本日は検証の方向性について、課題がかなり明らかになったかと思えます。本日の議論を踏まえてデータ分析をさらに進め、検証作業の中で進め方に課題が見えた点は、その都度修正していくのが良いかと考えております。

したがいまして、本日の議論を踏まえて、評価指標と検証データの整理、データ分析といった辺りを引き続きやっていきたいと思えます。以上ですが、よろしいでしょうか。

どうもありがとうございます。

6 閉会

○司会 次回の部会につきましては、2月27日（月）午前10時からを予定しておりますが、議事につきましては部会長と相談の上、事務局から改めてご連絡したいと考えております。よろしくお願ひいたします。最後に、今日頂戴した御意見以外に何かございましたら、お手元の用紙で事務局あてにご連絡をお願いしたいと思えます。

以上をもちまして、第7回高校教育改革検証部会を終了いたします。